

生命尊厳の哲学

The Philosophy of Respecting Lives

松添 寛之

MATSUZOE Hiroyuki

1. はじめに

「すべての人に優しい心が備わっている」上田会長が国際融合文化学会の挨拶でよく言われる言葉だ。そこには生命尊厳の哲学がある。

上田会長によると、この宇宙は心、言葉、行動の3つ（それぞれの頭文字をとって「**3Kの法則**」と呼ばれる）によって作られている。このような考えはさまざまな文学やことわざからも見出せる。また、科学の方も進歩すればするほど、この生命の哲学に近づいていると思われる。そこで文学と科学の両面から述べていきたい。

2. かけがえのない個々の生命

上田会長は、一期一会を大切にされる。わずかな機会を逃さずに一人ひとりに声をかけてこられた。すべての人は支えあっているという考えがあるからだ。対立ではなく感謝の気持ちがある。

次の詩は英国の詩人ジョン・ダンからの一節である。

人は孤島にあらず。自身のみで完全なる者はなし。
人はみな大陸をなす一部なり。

(『ダンの祈り』)

この詩から、生命は別個の存在ではなく、すべてつながっていると捉えられる。目の前の一人に心を開く。開くことで自身の可能性に気づく。そして自他の尊さが分かれば、世界の平和へと発展するのであろう。

3. 近代科学と上田先生の哲学の共鳴

古典科学の代表といえるニュートンの科学は、二つの物体の間に重力が働くという力学である。「もの」中心の見方で成り立っている。そのため生命は物質にすぎない、という見方になってしまう。その結果、人を手段と見なしてしまうのだ。また、正直は損する、と捉えてしまうのではないか。人が見ていなければ法律で罰せられることはないからだ。

一方、アインシュタインの相対性理論は、空間の3次元と時間の次元が融合した「時空」と

いう4次元で物理現象を捉えている。時間と空間を切り離すことができない。

また、ハイゼンベルグの不確定性原理は、物体（量子）の運動量を量ろうとすると、計測者の存在によって正確に測れない。観測する側とされる側の関係がある。

つまり、科学の進歩によって宇宙はより複雑であることが分かる。これは上田先生の縁を大事にする考えと切り離すことは出来ない。

4. まとめ

日本にも「風が吹けば桶屋がもうかる」という言葉がある。

先人の庶民の知恵から宇宙の本質を知ることができる。この世界はすべてが関係しているということだ。このように科学が進歩すればするほど、上田先生の宇宙観は科学的に証明されよう。

そして今回、めでたく「瑞宝中綬章」を受章された。人が見ていようがいまいと、常に自分に出来ることを行動されてきたその証といえる。最後は正直が得をしたのである。

【参考文献】

- ・池田大作『法華経の智慧 第1巻』聖教ワイド文庫、2001年 p.168-p.169
- ・ヘミングウェイ・大久保康雄訳『誰がために鐘はなる』新潮文庫、2000年
- ・ヘンリー・D・ソロー 佐渡谷重信訳『森の生活』講談社学術文庫、2005年